

娘^{むすめ}にされた男

く第三調教 性転換と躰直しく

第十一章 入学

聖希女学園□等部に入学、初日。実雄は、必要最低限の紹介とともに、女子□学生らの教室に投げ込まれた。席は一番前だった。

生徒たちに訝しげに見つめられ、暗い面持ちで着席する。

「では授業を始める。五十八ページをひらいて」

教師の言葉に、生徒たちが卓上においた教科書をめくる。こぼれそうになる涙をこらえ、

実雄は前日、優里に渡された教科書に折り目をつけた。

授業の音がとうとうと響く。内容はまるで頭に入らなかった。飛び込んでくるのはクラスメイトたちの心ない揶揄（やゆ）だ。

『みお、って言ったっけ。あの子、なんかヘンだよな』

『うん。絶対、ウチらと同年じゃない』

『なんで学校に来てるんだろ』

女顔で痩身とはいえ、実雄は成人した男性だ。生徒たちは、年頃特有の鋭い感性でそれを暴きたず。

好奇、侮蔑、懷疑。あらゆる視線がつきささった。実雄は唇をかみしめ、痩せた体を一杯縮めた。できることはそれしかない。

これ以上悪いことなんてない。そう思った。けれども甘かった。

「何をする気だ！」

昼休み。一人きりになれる場所を探していた実雄は、クラスメイトの空手部女子にしまった。黒髪をロングにした子と、つり目で茶髪の少女、二人だ。後者は和志の姪だった。もちろん逆らえない。

空き教室に引っ張り込まれ、あちこち体をまさぐられた。心理的抵抗から、実雄はつい暴れてしまった。

「うっせーな。ちよつと大人しくしろよ」

姪がつり目を細める。脱色しているらしい髪は、どこことなく不良っ気があった。

「みおちゃん、本当は男なんだって？」

黒髪の少女が言う。面白がつている口ぶりだ。

「男のくせに女学園に来るなんて、とんだ変態だね。目的はなに？ 覗きとか？」

「違っ……おい離せ、離せっ」

「暴れんじゃねーよ。男だつて言いふらすぞ。そうなたら……どうなると思う？」

実雄の頭に、今日の朝、優里に言われた言葉が甦った。

『聖希女学園は、文字通り、女が学ぶための園（その）よ。みおは女の子だし、そのように書類を届けてある。でも、あなたの体はまだ男性。バレたら大騒ぎになるわ。くれぐれも、周りに気取られないように。万が一、正体が露見したら離婚よ。慰謝料としてマンシ

ョンをもらうわ。あなたのことは追い出すから、そのつもりで』

ファーストブラを買ったとき、優里は「あなたを私と和志さんとの娘として育てる」と言っていた。そのくせ、今度は「追い出す」ときた。理不尽極まりないが、文句を言える立場ではない。

（追い出されるわけにはいかない。そうになったら、僕は生きていくすべがない）

職はない。貯金もない。あるのは、やってもいない前科だけ。優里に……正確には優里と和志に……見放されたら終わりなのだ。

「やっぱ男だな、ケツが薄い」

姪に、スカートの上から尻を撫でられた。無遠慮な手が、円を描くように動いている。尻つぺたにサワサワとしくすぐったさが走った。同時に、多足の虫に這われるのに似た気持ち悪さが、背筋をゾゾツとかけあがる。

「やめろってば！」

つい、強い声で制止をうながした。だが。

「ああん？ 新入りが、生意気な口きくんじゃねーよ。それを言うなら『やめてください』だろ、寝取られクソメイド！」

ドスのきいた声で返され、縮みあがった。昔ならそれでも少しは言い返しただろうが、今はむりだ。それに。

（いまこの子、メイドって……それに、寝取られって）

そんなことまで知っているのか。実雄の心に絶望が広がる。



「あんま声あげない方がいいぜ。お前、見た目はたしかに女だけど、声は野郎だからな。正体がバレるぞ」

「んっ」

あわてて咳払いをしたが、もちろん地声は変わらない。

「……にしても、くびれがねーな。男なんだから当然か。なんか、薬を飲んでるって聞いたけど。変わるところと、変わらねーところがあるんだな」

姪の言うとおりだ。乳房は出たものの、素の骨格は変わっていない。触られれば触られるほど、本物の女性との差異が浮きぼりになる。

今の自分は、男でも女でもない、中途半端な存在だ。そのことをまざまざと感じ、実雄は「透明になって消えてしまいたい」と願った。

自分を……実雄という男のすべてを、消したかった。

「もうやめてよ。恥ずかしいから」

地声の低さが目立たないよう、ボリュームを抑えつつ、精一杯の拒絶を示す。だが少女たちは止まらない。手首をつかまれ、抑えられた。

「スカートめくっていい？ いいよな」

姪の言葉に、心臓の鼓動音が二オクターブほど跳ね上がる。

（だめだ、今の下着は！）

やめてくれ。そう懇願したが、聞き入れなかった。

黒髪少女に、勢いよくスカートをまくり上げられる。





「ぶはっ！ ちょ待って、何このパンツ？ ガキじゃん！」

実雄が今はいっているパンツは、ブラを買いに行った時と同じだ。真正面にデカデカと「プリラブ」……子供に人気の魔法少女がプリントされたキャラクター下着である。

「違うんだ。これは……」

優里の命令である。実雄としては、女兒下着をはくくらいなら、彼女のお下がりを身につける方が百倍マシだった。ただ、選択権がなかった。

「だっせえ！ □学生にもなつてこんなパンツはいてるとか、ありえねー」

変態じゃねーか、と姪に吐き捨てられる。理由はどうであれ、その通りなので二の句がつけない。

「いいんじゃない。趣味は人それぞれってことで」

スカートをめくった女子生徒は、意外にも寛大な姿勢を見せる。ほんの少し、救われた気分になった。が。

「でもさ、なんで黒パンはいてないわけ？」

黒パン。インナーパンツのことだ。スカートがめくれても下着が見えないようにはく。

「本当は、人に見られたかったんでしょ。みんなの前でスカートめくって、似合いもしない幼児パンツを見せびらかしたかったんでしょ。あーあ、真正のド変態ね。キモッ」

「そ、そんなわけ」「あるでしょ」

言葉は途中でつぶされた。言い返す言葉は思いつかなかった。実雄は唇を噛みしめた。



まっとうな言い訳が通じるとは思えない。痴漢免罪のときがいい例だ。絶対的な事実の前に、あえかな真実はつぶされる。どう取りつくろおうと、実雄はキャラクターパンツを、スカートの下に直（じか）ばきしているのだ。

「っていうかさ、おまえ、股間おかしくね？」

実雄の手首をギリギリと握りしめながら、姪はつり目をブリラブに向ける。体のなかで一番恥ずかしい部分を注視され、実雄は顔を赤らめた。

「チンコのぶん、膨らみがあるはずだろ。なんでねーの？ 男なのに」

「ぐっ」

言葉につまった。ペニスの小ささは長年の悩みの種だ。

「もしかして……もしかすると、ほら。あれだよ、あれ」

「嘘。いやでも、膨らんでないし……ありえるかも」

含みのある言葉を交わす二人。ちよつと確かめてみよう、と言いつつ、

二人は実雄の股間に手をあてた。少女たちの熱が、薄い肌着ごしに伝わってくる。そんなふうに触られたらまずい。今はつけていないが、最近はずっと、貞操帯で射精管理をされていた。勃起する、射精しまう……と思った刹那。

「ひぎうおえああああ！」

強い衝撃が下半身から脳天に突き抜けていく。口から泡が飛び出した。

股間を踏まれたのだと、一拍遅れて気がついた。

「ぐ、えあつ。おあああ、うぐえああッ」

「やっぱそうじゃねーか。おまえ、短小なんだ。△学生サイズだな。こんなもん、あつてもなくても一緒だろ！」

「ぐほっ……おぐ、エうつ、お……ああ。んぐおえああッ！」

女の格好をしながら、男特有の苦痛を感じる屈辱。それでも実雄は、拳ひとつ上げることでできなかった。メイドとして女性にかしずき、すでに精神的に去勢されている。

じつとしていると、くりかえし蹴飛ばされた。痛みがビリビリと神経をうつ。それに加え、腹の中で大太鼓を叩かれているように、衝撃が内臓を襲ってくる。襲撃されているのは股間だけが、余波が全身に波打っていた。

「キモいんだよ。男のくせに！ そんな格好で、そんなパンツはいて！」

「ゴボッ、げほ……あ。がつ！ んおつ、ふげつ、おおあつ」

言葉がでない。呼吸すらうまく出来なかった。心の中で「やめて」「助けて」と叫びながら、股間を手で必死に抑える。だが蹴りの方が勢いが強い。

下半身が、生々しさのある嫌な音をたてる。熱っぽいものが、玉からぐじゅうとあふれる心配がした。下着が濡れ、目の前に白い星が飛ぶ。得体のしれない怖気（おぞけ）が走り、体中の汗腺から冷たい汗が吹き出た。思考回路が停止して、どこにいて何をしているのか分からなくなる。暑いのか寒いのかも判別できなくなった。そのくせ痛苦はしっかりと感じる。

いつそ本当に女になれたら。そんな思いが実雄の胸によぎった。女なら、女の格好をしても罵られない。女なら、こんな痛みも味わわないで済む。楽になれることだろう。



実雄はそのあとも翻られ続けた。凄まじい痛みにあたえきれず、股間を手で抑えたまま、泡を吐いて床にひっくり返った。意識は飛ばした。

気がつくくと、白い天井を見上げていた。見知らぬ場所だった。部屋に漂う薬品のおかげで、病院であることを知った。

程なくして優里がやってきた。彼女に話を聞かされ、実雄は現状を理解した。学校から直にかつぎこまれていた。

「あなたを運んだのは、此処のお医者様よ。わざわざ車を出してくださったの。優しい方で良かったわね」

「救急車……じゃないの？」

「あなたなんかを運ぶほど、救急隊の人は暇じゃないのよ」

優里の声はツンとどがっている。

「女の子たちにおちんちんを潰されたそうね。男のくせに抵抗の一つもできなかったの？ ……と言っても、無理ね。今のあなたには、そんなこと」

ここまで言っただけで、彼女は急に微笑みをむける。

「和志さんは顔が広い方なのよ。此処のドクターとも知り合いなの。彼が、あなたの体を綺麗に再建してくださったわ。みお、良かったわね。とても素敵よ」

優里は、ベッドに横たわる実雄の頭を、優しくなでてくれた。



「あなた、自分の体はもう見た？」

「いや、まだ見てないけど」

そう答えた瞬間、優里の眉根がキュッと動いた。

「言葉！」

「あつ、はい。えつと……も、申し訳ございません。まだ見ていません」

慌てて言い直すと、彼女は満足気に息を吐いた。

「じゃあ起き上がって見てごらんない。実はあなた、もう三日も眠り続けていたのよ」

「三日も？」

「そうよ。さあ早く。見なさい」

優里は含みのある笑いをする。嫌な予感を覚えながら、実雄は体をおこした。今更ながら、自分が裸であることに気がついた。

「なに、これ？」

飲まされていた薬の影響で、胸は膨らんでいる。それが今は、さらにふくら、綺麗な丸みをおびていた。ピンク色の乳頭は、小生意気にツンととがっている。尻の肉付きも少し良くなった。だが一番の問題は股間だ。

今までは、小さいながら、男性としての逸物が突き出していた。それが、完全に消えてなくなっている。竿もなければ玉もない。痕跡すら残っていない。あるのは一つの筋目のみ。

ピンク色の粘膜が、遠慮がちに縁をもちあげていた。どこからどう見ても、女性器だ。

余計なピラピラがないあたり、少し子供っぽさがある。

「パパが、首を長くして待っているのよ。三日間おやすみした分、遅れを取り戻さなきゃいけないわ」

混乱でからっぽになった頭の中に、優里の声がわぁんと響いた。

一枚、白いワンピースを頭からかぶせられ、実雄は車に乗った。連れて行かれた先は自宅マンションだ。三日ぶりの帰宅である。しかし家に入った瞬間、嗅ぎ慣れない空気が鼻をついた。

恐る恐る居間に入ると、完全に様変わりしていた。壁がぶち抜かれて部屋が広がっている。中央にあるのは高級そうな革張りの黒ソファだ。その前には真新しい大型テレビも設置されている。天井からはぎらぎらとした照明が光っていた。裸で四つん這いになれば、尻の穴まで丸見えだろう。カーテンに隔てられた向こうは寝室で、キングサイズのベッドがちらりと覗く。

「やあ、おかえり」

和志がソファに座っていた。映画を見ていたようだが、二人と見ると画面を切り、立ち上がった。

付き添ってくれていた優里が、あたりまえのように彼のもとへ寄った。わずかに数歩の移動だったが、実雄は例えようのない寂しさを感じた。

和志は慣れた手つきで優里の肩を抱いた。チュッ、と音をたてて彼女の額にキスを落とす。見せつけられても、実雄は何も言えない。顔をそむけることもできない。

「俺達に、新しい体を見せろ。服を脱いで。足を開け。つま先立ちでな。両手は頭の後ろにやるんだ」

優里から手を離しつつ、和志は、有無を言わせない口調で言う。実雄は言われたとおりの姿勢をとった。

裸の肌を照明に焼かれる。じりじりと……痛いくらいだ。気のせいかな、股間がひりついた。こんな風に、人に裸を見られるなんて。しかも、女体を。

「よくできている。もともと男だったなんて、信じられないな」

和志は無遠慮に、実雄のワレメに視線をむける。そこが一番気になるようだ。

「あの子、おちんちん、小さかったから。身体も細いし」

優里も同調する。

「きつと神様が間違えたんだ。女として誕生させるはずが、間違っつけてしまったんだ」口角をわずかに上げながら、和志はこれ見よがしに、自身の股間をズボン上からなでる。

「そうそう、聞くのを忘れていた。新しい体はどうだ、みお？」

ふざけるな、と言いたかった。たとえモノは小さくとも、実雄には男としての矜持（プライド）があった。しかし、ここで求められている言葉は恭順だ。与えられた肉体を、棄め、たたえなければならぬ。

「す、素晴らしいです！」





喉から出たのは、妙に甲高い、耳障りな声だった。自分ではなく、借り物の口が動いている気がした。

「……………これで、おちんちんの大きさに、悩まずに済みます。ゆ、優里様、和志様、ありがとうございます。メイドだった私を、こんな……素敵な娘にしてください」

羞恥と悔しさで吐き気がした。目が不自然に泳いでしまう。

「わ……私は、心から、感謝を致します」

「そう、良かったわあ。じゃあこれに着替えて」

優里が、聖希女学園の制服を取り出した。ただし、上だけ。

「これを着て、パパにご奉仕するのよ」

奉仕。不吉な単語だ。

（またフェラチオをさせられるのか）

暗い気分では英雄は着替える。皮肉にも、新しい体は制服になじんだ。女性用の服は、やはり、女性の身体にこそ寸法があう。

「それじゃ、みお。感謝を込めて四つん這いになりなさい。はじめての操（みさお）を、和志さんに差し出すのよ」

カーテンが勢いよく開かれた。白いシートに覆われたキングサイズのベッドが、雪原のように目前のように現れる。和志に突き飛ばされ、英雄はそこにダイブした。

彼に尻をつかれ、ぐいっと割られる。混乱と恐怖が闇のように押し寄せてきた。

「な、何をするんですか？」

「いやあね、カマトトぶっちゃって」

優里の声がふってくる。

「あなたはこれから、和志さんに犯されるのよ」

本当は分かっているんでしょう、と彼女は笑う。確かに予想はしていた。が、信じられない。叫ぼうとしたが。

「この期に及んで『自分は男だからイヤだ』と叫ぶんじゃないだろうな？」

和志に機先を制された。もう何も言えない。

肛門の前にある、不思議な部分を親指でほぐされた。男だった時は、何もなかった空間だ。味わったことのない感触に、恐怖がさらに膨れあがる。

（嫌だ、嫌だ。嫌だあ！）

子供の駄々のように声をあげる。ただし、心の中で。実際に口から出ているものは、わけの分からない鳴咽と、乾いた吐息だ。

「いいわねえ、和志さんに初めてを貰ってもらえるなんて」

私もされたかったわ、と優里は言う。心底うらやましそうな声だ。

「でも、彼は太いから……ちよつと痛いかもね」

「ひっ……おあッ、ぎゃああああ！」

硬くて弾力のある太いものが、極めてせまい中を強引にこじ開け、入ってきた。鋭い痛みが下半身から脳天を直撃する。玉潰しのとき同様、汗腺から冷や汗が一気に流れ出た。



「ひぎいああッ、いだいっ、痛い痛いッ！ あああ、やめて。やめてくださいっ」
逃げたいが、下半身を抱えられているため動けない。

「くくっ、完全に女の声だな」

極太のイン・アウトを繰り返しながら和志が言う。

「妻を奪われ、チンコを取られてメス穴をはめられ。あげく、寝取り男に処女を奪われる……最高にみじめだな！」

彼の声は弾んでいる。相手に恥辱を植えつけ愉しむ、加虐者の声だ。

「いだい！ 痛いっ。やめて……あああ。引き裂かれるっ！」

開通したばかりの女の穴が、ギチッミチッと悲鳴をあげる。肛門ではない。もちろん尿道でもない。だが実雄は、まだ納得していなかった。自分に、男を受け入れる専用口があるなんて。

「喜んで受けるよ。これはお前が、一人前の女になるための儀式なんだ」

「ひぐっ、んううっ。あ……あああ、ぐうっ、いぎいッ」

彼は容赦なく体を前後にゆする。悪魔が拍手をするような、パンッパンッと派手な音が響いた。真紅が、二人の結合部から垂れ堕ちた。

鉄のにおいに、実雄はようやく実感した。自分は本当に女になったと。

もう、男であったことは忘れよう。その方がきつと楽だろう。……そう思った時だ。

「気持ち良くなった時が、あなたが本当に『女』になった時よ。ねえ、実雄？」

みお、ではなく実雄。本名を妻に呼ばれ、男である事実を掘りおこされる。



「僕は……はあッ、僕、おああッ。ひぎッ、ああ……」
逃れようのない事実。男だったが女になり、男性にファックされている。しかも、制服姿で。

次第に痛みがなくなってきた。体が慣れてきたのだろう。一突きごとに、体の奥底からゾクッ快感が湧いてくる。

「パパのおちんちんはどう？ とっても気持ちいいでしょう。あなたとは大違いよ」

小馬鹿にされても言葉を返せない。淫らな感情に頭がとろける。体がほてり、全身がねつとりと汗ばみはじめる。冷たかった汗が、熱っぽいそれに変化する。

「いい顔ねえ。極太のおちんちんでバックセックス。男根で体を串刺しにされて……男だった時の記憶がぜんぶ吹っ飛んじやってる顔だわ」

肉体のぶつかりが響く室内に、優里の声は呪いのように響く。

「和志さん、どう？ この子の膣内（なか）は」

「悪くない。ギチギチに締め付けて精液を絞り取ろうとしてきやがる。だが、優里には劣るな。売れ残ってワゴンに入れているオナホって感じだ」

彼はまたこうも続けた。射精感をおさなりに促されると。

「ぐ……ううう」

褒められても嬉しくなんてないが、けなされるのはショックだ。劣等感が、実雄の中に穢れた黒いシミを作る。

（僕は、男としても女としても二流だ。本当に……どうしようもない）



「なあに、及第点はとれているさ。あともう一押ししてところだな」

軽口を叩きながら、和志はズコズコッと最奥を貫く。さっきまでより早く、重い突きが繰り返された。実雄は必死にベッドのシーツを握りしめた。

「じゃあほら、お願いしなさい」

実雄はつばを一つ飲んだ。

フェラチオしたとき鼻をついた、青臭い汚臭を思い出した。あれと同じものを、下から受け入れるのだ。それをされたら、自分は本当に「女」になる。

迷いが生まれた。本当にされていいものか？ しかし口は、二人におもねる。

「お、お願いします。射精してください」

「……それだけ？ もっとちゃんと言いなさい。情けない声で乞いなさい」

「そうだ。そんな適当なお願いで、俺の精液をもらおうなんて図々しい。……ほら、早く言え。廉価なメスとして服従しろ！」

和志のペニスが、実雄の体の奥に、にぶい衝撃を響かせ続ける。男なら一生、味わうはずのない感覚だ。

「ご、ご主人様の濃厚な精液を、私の、安っぽい穴（ホール）に恵んでくださいっ」

言い終わった直後、熱いものが体の中に流れ込んできた。

「ふえっ、おあ……あああああ」

快楽の中に暗鬱とした思いが混じる。それでも実雄の体は、精液とペニスを抱きしめていた。優里の嘲笑の声が、耳から脳に突きぬけ、響いていた。



第十三章 排尿のしつけ

性転換の手術は本当にうまくできていて、いくら体を見渡しても、切ったあととは見当たらなかった。だが直後に行なった性行為のせいで、ひとつ問題が発生した。尿の排泄をコントロールできないのである。立ち上がったときや歩くときなど、些細な運動で漏れてしまう。その一方、強い尿意を覚えてトイレに駆け込んだのに一滴も出ない。実雄は、一日のうちに何度も粗相（そそう）を繰り返した。結果、小児のように、トイレのトレーニングをすることとなった。

おまるが用意された。正面にはブラブラの絵がプリントされており、ピンク色の持ち手がついている。本来は女兒が使うものだ。優里いわく「これを使って、便器のあるところでの排泄を体に覚え込ませる」とのことだ。

彼女が見ている前で、スカートを脱ぎ、パンツを脱いでおまるにまたがる。便座は、子供の使用を想定して作られている。大人の体重を受けて、少しきしんだ。

「上手におしっこできるかな？」

妻の嘲笑に、実雄は知らずのうちにうなだれた。膨らんだ乳房と、つるりとした股間が視界に飛び込んでくる。破瓜も終わり、いまや完全に女性だ。

やみくもに叫びたかった。だが、叫んで何になるというのか。現実は一切変わらない。情けなさか度をすぎて、泣くことすら今は忘れた。

（犯されなかったら、こんなことにはならなかったのかな）

頭の中に、悶々とした黒雲が渦をまく。



「みお、遠慮しなくていいのよ。そこはトイレだから、いくらでも出して構わないの」
優里の声は、故意につくった優しいものだ。軽蔑が見え隠れしている。実雄は羞恥に胸を嘔まれた。大人の人が、人前でおまるで排泄なんて、みっともなくして仕方がない。

「んっ、ううう。はあ、はあっ」

下半身は、部屋の空気に吹きさらしだ。裸の肌は心もとない。迷子になった時のような焦りが走る。いっぼう、上半身は強くほてっていた。大きなセーラー襟が、背中を妙に温めてくる。脱ぎ捨てたい気分になったが、我慢した。

排尿のため、いきむと、ワレメがもたえるように動いた。ピンク色のラインは、強い未熟性を残している。男根をしゃぶったことがあるとは思えない。

男だったとき、実雄の性器は、男児のように小さかった。女になりたいまは、女兒のようなスジマンだ。綺麗ではある。女性なら誰もがうらやむだろう。だが実雄は、うれしいとは全く思わなかった。

どこまでいっても、自分の生殖器は子供様式だ。それなのに性行為はできるのだから、いやらしいという他ない。それに……。

（僕はもう、優里を抱くことは出来ないのかな）

つるりとした恥丘を見て、心の中で呟いた。問うまでもなく、ムリだ。挿入するものがないのだから。

ペニスがあった頃が、遠い過去のような気がしていた。





「なかなか出ないわねえ」

じれた声を優里はあげる。実尾は慌てた。彼女を怒らせてはいけない。

おまるのきしみを無視し、下腹にくっつき力を込める。ちよろちよろと、薄黄色の液体が流れ落ちた。

「まあ偉い。みお、一人でおしっこができたのね。いっぱい出てるじゃない」

尿量を指摘する優里の声に、監視を受けているという精神的圧迫がのしかかる。緊張で、せつかく成した排泄が止まりそうになった。だがここで止めたら、次にいつ出るかわからない。何しろ制御がうまくいかない。

（普通なら、ちゃんとトイレでできるのに。催したらトイレに駆け込んで、それで済むのに）

ちよっと前まで、排尿といえは、トイレで立つて行うものだった。男なのだからそれが普通だ。それがいまや、部屋の間のおまるにまたがり、人に見られながら座っている。悔しさに、顔がゆがんだ。

「あら？ もうおしまい？」

優里の声に我に返った。尿意はあるのに止まっている。

目をつむり、心から感情を追い出した。排尿だけに集中する。

「ふっ、うう……はあ、はあっ」

視界が黒に覆われると、他の五感がとぎすまされる。びしゃびしゃ、ピチッと、尿が流れる音が耳を打った。

膀胱を意識し、溜まっている尿を押し出す。強引に出すから勢いが強い。おまるの底に落ちたあと、はねかえって尻を濡らしてくる。尻からまた底に垂れる。

体内から出る尿は温かいが、濡れた肌からは体温が奪われる。温かさと冷たさのぐちゃ混ぜが気持ち悪い。

「ずいぶん溜めていたのねえ。精液も、これくらい出れば良かったのに。そうすれば、小さくてもちよつとは見どころが出たのにねえ」

「ぐつ……ううう」

「全部出すのよ。次にお漏らしをしたら、お仕置きよ」

物騒な言葉に、おまるの取っ手をつかむ手が震えた。五臓六腑がぎゅうつと冷たくなる。

排尿がまた止まりそうになった。精神の力で出し続けた。皮肉だが、たしかにこれは、排泄のトレーニングになっている。

「ふっ。ううっ、んー、はあっ」

「いいわ。その調子よ。女の子としてのオシッコが、すっかり板についてきたわね」

優里は優しく言った。猫なで声の見本のようだ。こうしてこちら安心させておいて、

「あなた、本当に男だったの？ 信じられない。その身体に、おちんちんがついていたなんて」

と突き落とす。誰に言われても苦しい言葉だが、妻にいわれると、ことさら喉がつまる。

男の尊厳が砕かれた。それでも、それを捨てられない。身体は手術で変わったけれども、心はまだ、優里の夫のままだ。



おまるでのトイレトレーニングはそのあとが続いた。繰り返すうち、大分コントロールがきくようになったが、それでも完璧にはいかなかった。

「いけない子ね！ おしっこを床でしちゃいけないって、何度言ったら分かるの？」

優里の鋭い声が飛ぶ。近くでは和志が、ソファアに座ってゆうゆうとコーヒーを飲んでいた。ふたりとも会社終わりだ。今日も、仲良く一緒に帰ってきた。

「おまるでのトレーニングをはじめてから、そろそろ十日になるか」

彼は壁にかかっているカレンダーを一瞥する。

「なかなか完璧にならないな」

「ええ。飲み込みの悪い子で苦労するわ」

ピシャッ！ 尻を平手打ちで叩かれる。こんな所を叩かれるなんて、子供のとき以来だ。しかもいま、実雄は下半身に何もつけていない。手打ちの感触が尻に痛かった。

叱責の原因は、トイレだ。おまるが間に合わず、床に漏らしてしまったのだ。しかも、二人の前でだ。おまるは居間のすみに置いてあり、部屋を横切らないと行けないから、とりつくろえなかった。

「尻をあげなさい」

髪をつかまれ、無理やり顔を上げさせられる。引っ張られる痛みにあたえながら、実雄は尻を高く突き出した。

和志が目細める。裸で尻をあげる「女」に、性欲を感じているのかもしれない。実雄は彼とのセックスを思い出した。屈辱が塊となり、心の沼に沈みこむ。



「おもらしをしたら、まずは何ていうの？」

優里の声はまさに、小さな子供を叱咤する母親のそれだ。実雄は和志を見上げながら、必死に謝罪の言葉を考えた。「ごめんなさい」と言うだけでは済まされない。暗黙のルールだ。

「私は、床におもらしをしてしまう、だらしない女です。パパとママに買ってもらったおまるも、ちゃんと使えないおバカさんです」

そうだな、と言わんばかりに和志が口角をあげる。非情な肯定だ。

「ちゃんとオシッコできるよう、お仕置きをしてください。私をしつけてください」

一番言いたくない言葉を放った。床に尿をこぼしたことはたしかに悪い。だが、それで罰をうけるなんて。男としてというより、大人として辛い。こみ上げてくる屈辱が、引っかかった小骨のように、チクチクとした痛みをともなう喉を刺してくる。

「漏らしたものは、あとでちゃんと片付けるんだぞ」

「は、はい！ もちろんです」

失禁時の片付けは実雄の仕事だった。手間はかかるが、逆にありがたかった。自分で掃除する方が、プライドが傷つかずにすむ。

「和志さん、あれをとってくれる？」

「ああ」

和志は優里にあれ、もとい鞭を手渡した。いわゆる乗馬鞭だ。扱いはあまり難しくない。対人用に、柔らかく軽めに作られている。それでも意外と威力は強い。





どろりとした恐怖が、実雄の心に渡った。すでに何度も叩かれていたので、痛みはよく分かっていいる。被虐趣味があつたら喜べるが、あいにく、そういった趣味はない。来るであろう痛み、身体がわなないた。

優里はまず、何もないところで鞭を一回振った。風切りの音が、人を喰う獣の咆哮のよう

に耳に届く。

「何度叩かれたが、ちゃんと数を数えること。一、二と、口に出して言うのよ」

数字は分かるわね? と尋ねられる。そんなこと、聞かれるまでもない。

「一回ごとに『お漏らししてごめんなさい』と言うこと。いいわね?」

「はい」

嫌だ、言いたくない。やめて、叩かないで……これらの声はしかし、実雄の心の中だけで終わった。逆らうなんてできないのだ。

「ひぎいっ!」

先端(チップ)が空中でうなり、尻たぶを鋭く打った。鋭い痛みが走る。

「い、いち。ごめんなさい。……ひっ! ニかい。ごめんなさい。ッああ!」

「そうそう。その調子よ。ちゃんと反省しなさい」

「さん。お漏らしして、ごめんなさい。四つ、ごめんなさい」

数字と謝罪を交互に繰り返す。痛みで腰が砕けそうになった。足がガクガクとして、尻をあげるのが辛くなる。



「五回。漏らしてごめんなさい。六つ……だらしないうとして、ごめんなさいっ」

言いながら、実雄は思った。こうなった以上、大人の男だった時のことは置いてほしい。自分の胸ひとつにしまっておきたい。だが、彼女はそれを許さない。こちらの心情をさとして、的確にえぐってくる。

「頭の中まで子供になっちゃったのね。男『だった』実雄さん。いいまねえ。床にうっかり放尿して、妻に鞭で叩かれるなんて、昔のあなたは、想像すらなかったでしょう」

甘さのある声は冷やかに満ちている。

「あまりママを困らせるんじゃないぞ」

和志が、大仰な仕草で立ち上がった。何をするのかと思えば。

「元・粗チンの玉潰しお漏らし女学生」

実雄の無様な現状を耳打ちし、またソファアに戻る。完全な嫌がらせだ。

七、八、九。数が増すことに尻の痛みが増える。腰が落ちるたび、鞭で下から上につきあげられる。痛みにあおられながら、実雄は交尾の姿勢を取り続けた。そして二十を超え、頃、実雄はお漏らしをはじめた。痛みで下半身の制御ができなくなっていた。

「ご、ごめんなさい。私、また漏らし……ッ、二十五。ううう、ごめんなさい」

「お漏らしのお仕置きでまた漏らすなんて。どこまでいやらしいのかしら」

「なあに、そのうちできるようになるさ」

和志が足を組んで言う。

「みお。下のしつけが完成したら、お前を社交界にデビューさせてやる」